私の名前「宣明」について

私の名前はよく「宜明（よしあき）」と間違えられる。また、「宣」という漢字の用例はそれほど多くなく、字を聞かれたときの説明が難しい。「宣言のセン」といっても怪訝な顔をされ、やむなく「宣伝・広告のセン」とか「ウ冠に一、日、一」とかいうことになる。もう少し恰好の好い説明がないものかといつも思う。また「宣明」の読み方だが、常識的には「のぶあき」で、最初から「のりあき」と正しく読んでくれる人はまずいない。姓の「川中」もよく「中川」と間違われる。病院などで「ナカガワ　ノブアキさん」などと呼ぶ声が聞こえたら、とりあえず「ハイ」と返事することにしている。

今年（2009 年）は父の七回忌がある。生前、父が私に語ったところによると「宣（のり）」の字（と読み方）を名前に選んだのには３つの理由があったらしい。

ひとつめは、父の言い方をまねると「縦に割れる字にしたんや」ということである。姓の「川中」が左右対称に近い漢字からできているので、名の方も左右対称に近い字を選んだ、ということらしい。「明」は左右対称に近くないかもしれないが、日と月を左右に配した字形には、ある種の対称性が感じられる。私は後に「群の表現論」という、まさに「対称性」の数学的研究とされる方面に進んだが、この名前が何らかの影響を及ぼしているのかもしれない。

ふたつめは「川という水の気のある陰（いん）の字が姓に入ってるんで、名の方には日みたいな火の気のある陽（よう）の字を入れようと思ったんや」ということである。父は迷信を信じたりはしなかったが、私が生まれる約 1 年前に 1 歳の男の子を亡くしていたこともあり、少しでも縁起のいい名前にしたくて「日」を含む漢字を選んだのであろう。

みっつめは「エライ学者の本居宣長の名前から一字を貰（もろ）たんや。ワシは本居宣長が好きやったから」である。これが「宣」を「のり」と読ませる理由らしい。父には特別な学歴はなく、学問とは何の縁もない人だったが、戦前の小学校の国定教科書には本居宣長とその師である賀茂真淵の一生にただ一度の出会いを描いた「松阪の一夜」という佐々木信綱の文章が出ており、本居宣長は戦前の小学校を出た人なら誰でも知っている有名人だったのである。父の死後、私は、偶然、この事実を知った。

「松坂の一夜」は、戦前、国策的に利用されたという不幸な事情のためか、今では一般的には知られていない。しかし、読めば分かるとおり、これはそういう事情を越えた名品である。当時の多くの子供の心に、そして父の心にも深い印象を与えたことだろう。

（http://www.norinagakinenkan.com/norinaga/kaisetsu/ichiya.html）

名前には親の気持ちがこもっている、とよく言われる。良い名前をつけてくれた父に、改めて感謝したい。